

障害者支援施設における自閉症者に対する外出時の支援

松 山 郁 夫

Support of going out for the Person with Autism
in the Facility for Disabled

Ikuo MATSUYAMA

佐賀大学文化教育学部研究論文集 第17集 第2号
JOURNAL OF THE FACULTY OF CULTURE AND EDUCATION
SAGA UNIVERSITY
VOLUME 17, NUMBER 2
January 2013

障害者支援施設における自閉症者に対する外出時の支援

松 山 郁 夫

Support of going out for the Person with Autism in the Facility for Disabled

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

本研究の目的は、障害者支援施設において生活支援員が自閉症者の外出時の状況をどのように捉えているのかを明らかにすることである。このため、障害者支援施設の生活支援員を対象に、自閉症者の外出時の状況に対して意識する程度を問う、独自の質問を記載した質問紙票によるアンケート調査を実施し、有効回答がなされた296人の回答を分析対象とした。質問項目について因子分析を行った結果、第1因子「外出における情報取得のスキル」、第2因子「外出行動のための社会的スキル」、第3因子「外出時の情緒的安定」が抽出された。また、生活支援員は自閉症者の外出時の状況を「外出時の情緒的安定」、「外出行動のための社会的スキル」、「外出における情報取得のスキル」の順に捉えようとしていることが示唆された。これらの因子は、生活支援員が自閉症者の外出時の状況を捉える視点と考察した。

Key words : 自閉症者、障害者支援施設、生活支援員、外出時の状況

I. はじめに

自閉症については、1943年にカナーが最初の報告を行って以来、約70年が経過している。その間に自閉症の原因論については、初期は、統合失調症が早期に発症したとする説、親の養育を原因とする後天性の情緒障害説（心因論）があったが、ラターが言語・認知障害説を唱えて以降、発達障害（先天性の脳の機能障害）とする見方が有力になり、現在は、脳の機能障害を前提にしながらも社会性の障害を一次障害とする説が広まっている。このように、原因論には何度も変遷があるが、自閉症を定義する場合、その臨床的特徴から DSM-IV（1994年）では、社会性の障害、コミュニケーションの障害、及び想像力の障害とそれにもとづく行動の障害の3つを有する発達障害とされている¹⁾。なお、2013年5月には DSM-5の発表が予定されている。

自閉症の基本的な障害として、言語障害、前後関係の理解の障害、抽象の障害、コード化の障害の4つ

が指摘されている (Rutter & Shopler 1978)²⁾。さらに自閉症には独特な障害特性があり、特に人間関係の障害が社会適応の困難さをもたらしている。したがって、自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく必要がある³⁾。

生活支援員は自閉症者とコミュニケーションをとることができるように「受容的配慮」、「言語的配慮」、「動作的配慮」、及び「視覚的配慮」を心がけている⁴⁾。このため、生活支援員は自閉症者の独特な行動特徴等を踏まえながらコミュニケーションが成立するように配慮し、障害を軽減するように図っていると考えられる。

「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律(バリアフリー新法)」が2006年に施行された。その趣旨は、高齢者、障害者(身体障害者・知的障害者・精神障害者・発達障害者を含む全ての障害者)、妊婦、けが人等の移動や施設利用の利便性や安全性の向上を促進するために、公共交通機関、建築物、公共施設、駅を中心とした地区、高齢者、障害者などが利用する施設が集まった地区のバリアフリー化の推進、及びバリアフリー化のためのソフト施策の充実である。

自閉症者の生活の質を高めるためには、バリアフリー化のためのソフト施策の充実が欠かせない。特に、自閉症者が地域で健やかな生活を営むためには、自閉症者が外出時のスキルを習得できるような支援をすることが求められる。

以上のことから、障害者支援施設等で、日々自閉症者との人間関係の交流を通して行動を展開する支援をしている生活支援員が、自閉症者の外出時の状況をどのように捉えているのかを検討しておく必要がある。しかしながら、現時点では、このことに言及した研究はなされていない。このため、本研究の目的は、障害者支援施設の生活支援員における自閉症者の外出時の状況に対する認識を明らかにすることとする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、自閉症者が入所している障害者支援施設の生活支援員を対象として、自閉症者への外出支援に対する意識の程度を問う、独自の質問を記載した質問紙票によるアンケート調査を実施した。

調査対象は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設(旧体系における知的障害者更生施設)において、青年期・成人期の自閉症者の生活支援を行っている生活支援員とした。無記名で独自に作成した質問紙を郵送により配布・回収した。合計331人の回答のうち、全項目に回答している296人の質問紙調査票を有効回答とし(有効回答率89.4%)、分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種類の付記した。

分析対象者のプロフィールは次の通りであった。

性別は、男性164人(55.4%)、女性132人(44.6%)であった。

年齢は、21歳から74歳で、平均年齢34.1歳(SD:9.6)であった。

自閉症者に関わった年数は、1年から36年で、平均6.3年(SD:5.8)であった。

なお、分析対象者296人全員が、主に関わっている対象者の時期については青年期と成人期、障害種類は知的障害のある自閉症であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成23年11月1日より11月30日までの約1か月間とした。

調査は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの知的障害者更生施設66か所に、独自に作成した質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。21か所（送付した施設の31.8%）から回答が得られた。なお、倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した施設に対して、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化するため施設名は一切出ないことを文書で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。

3. 調査内容と分析方法

質問紙調査票の作成にあたっては、自閉症者の生活支援を行っている入所形態の障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）の生活支援員10人に、自閉症者の外出時の状況を把握するときに意識していることや留意していることを尋ね、複数回答があった23項目を質問項目として使用することにした。

自閉症者の外出時の状況に関して意識する程度を問う独自の23項目の質問項目における回答の仕方は、「まったく気にしていない」（1点）、「あまり気にしていない」（2点）、「どちらとも言えない」（3点）、「ある程度気にしている」（4点）、「かなり気にしている」（5点）の5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1～5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。なお、各因子の Cronbach の α 係数を求め、各因子別、および全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

Ⅲ. 結 果

各項目の平均値・標準偏差については表1の通りであった。平均値の最小値は2.18（「5. 簡単な地図を読むこと」と「9. 地図を見て目的地に行くこと」）で、最大値は4.44（「4. 危険を避けること」）であった。全23項目中、8項目が2点台（34.8%）、11項目（47.8%）が3点台、4項目（17.4%）が4点台であった。

これら23項目について、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.92であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値4298.36 $p < .01$ ）。このため、23項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら23項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、9.72、2.71、1.17、1.15、……というものであり、スクリープロットの結果からも3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を除外し、再度、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンは表2の通りであった。回転前の3因子で20項目の全分散を説明する割合は62.3%であった。なお、これらの20項目について Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.91であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値3809.46 $p < .01$ ）。Promax 回転後の最終的な因子パターンは表2の通りであった。

各因子の Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子に関しては $\alpha = 0.93$ 、第2因子に関しては $\alpha =$

0.88、第3因子に関しては $\alpha=80$ であり、全項目で0.93との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は、「6. 時刻表を読むこと」、「5. 簡単な地図を読むこと」、「9. 地図を見て目的地に行くこと」、「17. 運賃表を読むこと」など、主として目的地に行くまでの道順や費用に関する情報を取得することを内容としていたため、「外出における情報取得のスキル」と名づけた。

第2因子は、「11. 信号を見て安全に横断すること」、「21. 踏切を安全に渡ること」、「12. 危険を意識すること」、「16. ホームやバス停で待つこと」など、主として外出時に必要な社会的スキルに関する内容を内容としていたため「外出行動のための社会的スキル」と名づけた。

第3因子は「20. 予期していないことが起きても落ち着いていられること」、「19. 予定が変更になっても従うことができること」、「2. 多くの人の中における情緒の安定」で、外出時に安定して過ごすことを内容としていたため、「外出時の情緒的安定」と名づけた。

因子別の平均値 (SD) は、第1因子2.42 (SD : 0.86)、第2因子3.80 (SD : 0.72)、第3因子4.04 (SD : 0.73) であった。

各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、3因子の平均値間には有意差が認められた (表3)。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、すべての因子の平均値間に有意差が認められた。このため、生活支援員は自閉症者の外出時の状況を、第3因子「外出時の情緒的安定」、第2因子「外出行動のための社会的スキル」、第1因子「外出における情報取得のスキル」の順に捉えようとしていることが示唆された (表4)。

表1 自閉症者の外出状況に対する意識についての平均値と標準偏差 n=296

質問項目	平均	標準偏差
1. バスや電車等公共交通機関でマナーを守ること	3.91	.919
2. 多くの人の中における情緒の安定	4.28	.818
3. 自分の持ち物を管理すること	3.37	.993
4. 危険を避けること	4.44	.748
5. 簡単な地図を読むこと	2.18	.965
6. 時刻表を読むこと	2.22	.969
7. 公共交通機関を利用するときバスカード等で運賃を支払うこと	2.61	1.148
8. 公共交通機関を利用して目的地まで行くこと	2.81	1.192
9. 地図を見て目的地に行くこと	2.18	.980
10. 公園や図書館等目的地で過ごすこと	3.02	1.160
11. 信号を見て安全に横断すること	3.82	1.131
12. 危険を意識すること	4.16	.926
13. 地域のイベント情報をテレビやインターネット等で得ること	2.33	1.018
14. 利用している福祉施設や職場に行くこと	3.03	1.145
15. 他者に迷惑をかけないように社会的マナーを守ること	4.04	.873
16. ホームやバス停で待つこと	3.44	1.084
17. 運賃表を読むこと	2.23	.995
18. 静かにバスや電車等の公共交通機関に乗っておくこと	3.63	1.030

19. 予定が変更になっても従うことができること	3.90	.881
20. 予期していないことが起きても落ち着いていられること	3.95	.895
21. 踏切を安全に渡ること	3.71	1.119
22. 外出時に金銭管理をすること	2.81	1.134
23. 外出の用意をすること	3.26	1.097

表2 自閉症者の外出状況に対する意識についての因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子「外出における情報取得のスキル」			
6. 時刻表を読むこと	.952	-.083	-.043
5. 簡単な地図を読むこと	.923	-.089	.003
9. 地図を見て目的地に行くこと	.872	.007	-.066
17. 運賃表を読むこと	.854	-.172	.121
7. 公共交通機関を利用するときバスカード等で運賃を支払うこと	.703	.217	-.066
13. 地域のイベント情報をテレビやインターネット等で得ること	.687	-.032	.063
8. 公共交通機関を利用して目的地まで行くこと	.591	.331	-.106
22. 外出時に金銭管理をすること	.538	.148	.104
第2因子「外出行動のための社会的スキル」			
11. 信号を見て安全に横断すること	-.031	.985	-.225
21. 踏切を安全に渡ること	-.021	.755	-.011
12. 危険を意識すること	-.017	.703	-.021
16. ホームやバス停で待つこと	.129	.507	.144
18. 静かにバスや電車等の公共交通機関に乗っておくこと	-.006	.479	.317
4. 危険を避けること	-.046	.470	.190
15. 他者に迷惑をかけないように社会的マナーを守ること	-.028	.441	.333
1. バスや電車等公共交通機関でマナーを守ること	.003	.424	.266
10. 公園や図書館等目的地で過ごすこと	.230	.423	.098
第3因子「外出時の情緒的安定」			
20. 予期していないことが起きても落ち着いていられること	.042	-.068	.861
19. 予定が変更になっても従うことができること	.008	.007	.802
2. 多くの人の中における情緒の安定	-.079	.375	.406

表3 自閉症者の外出状況に対する意識についての分散分析の結果

区分	平方和	自由度	平均平方	F値
外出状況	451.753	2	225.876	794.397*
被調査者	357.060	295		
誤差	167.759	590	.284	

*p<.05

表4 自閉症者の外出状況に対する意識についての多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子	第3因子「外出時の情緒的安定」
第1因子「外出における情報取得のスキル」	1.375*	1.621*
第2因子「外出行動のための社会的スキル」		.246*

* $p < .05$

V. 考 察

障害者支援施設において、生活支援員が自閉症者の外出を支援するときに普段意識していることの程度を問う全23項目の各平均値のうち、8項目が2点台(34.8%)、11項目(47.8%)が3点台、4項目(17.4%)が4点台であった。このため、生活支援員は自閉症者の外出時の状況を捉えるとき、ある程度意識しているところとあまり意識していないところがあることが窺える。特に、4点台の項目は得点の高い方から「4. 危険を避けること」、「2. 多くの人の中における情緒の安定」、「12. 危険を意識すること」、「15. 他者に迷惑をかけないように社会的マナーを守ること」であり、危険に関すること、情緒の安定、及び周囲に迷惑をかけないことに関する意識が高いといえる。

生活支援員は自閉症者の不適応行動に気をつけて生活支援を行っており、不適応行動を低減させる対応方法の導入が必要と捉えていることが示唆されている。不適応行動を低減させるには、適応行為をとるために必要な情報を知らせる必要がある⁵⁾。したがって、第1因子「外出における情報取得のスキル」は、生活支援員が、自閉症者が外出するのに要する情報の取得ができているかどうかを捉えようとしていることを表しているといえよう。

生活支援員は、自閉症者に対してコミュニケーション技能・余暇活動の指導が必要で、日中活動の場を重要視していることが明らかにされている⁶⁾。生活支援員は、自閉症者が社会的スキルの習得の状況を重視しながら支援していると見られる。したがって、第2因子「外出行動のための社会的スキル」は、生活支援員が自閉症者の外出時に必要な社会的スキルの習得状況を捉えようとしていることを表していると考えられる。

生活支援員は自閉症者の行動に関して、自閉症者とのコミュニケーションが成立しないことによって、内面の心理的特性を捉えることに困難さがあると認識している⁷⁾。また、生活支援員は、対人関係の中で表れる自閉症者の感情を窺い知ることに困難さがあり、自閉症者の感情を対人、不安、高揚に関する3つの視点から把握しようとしている⁸⁾。第3因子「外出時の情緒的安定」は、生活支援員が自閉症者が示す不安や興奮等の情緒に関する感情を、敏感に捉えようとしていることを表していると推察される。

障害者支援施設において、生活支援員は自閉症者に対する生活支援の有効性を「情緒面への支援」、「対人面への支援」、「感覚面への支援」の視点から掴み、自閉症の障害特性を意識しながら支援していること、これら3視点を関連づけることで自閉症者の状態像を捉えようとしていること、及び自閉症者に対する情緒面への支援に対する有効性が生活支援の達成感に影響を及ぼしていることが示唆されている⁹⁾。つまり、生活支援員は自閉症者の情緒面の支援を重視しているといえる。

また、生活支援員は自閉症者の生活状況を捉える視点については、優先順位が高い方から「心理状態を捉えること」、「日常生活技能を捉えること」、「社会適応技能を捉えること」であると示唆されている¹⁰⁾。社会適応技能よりも日常生活技能を優先しているため、身近なことができるかどうかを優先して見ている。このことと同様に、生活支援員は自閉症者の外出を支援する場合も、第3因子「外出時の情緒的安定」を捉えることを重視している。その次に、第2因子「外出行動のための社会的スキル」、第1因子「外出

における情報取得のスキル」の順に捉えようとしていると考えられる。このため、生活支援員は、自閉症の外出時の状況についても、まず、心理状態を重視し、次に技能面を捉えようとしているのであろう。

VI. 結 論

障害者支援施設の生活支援員は自閉症者の外出時の状況を捉えるときに次のような認識があると考察した。

- ①危険に関すること、情緒の安定、及び周囲に迷惑をかけないことに関する意識が高い。
- ②「外出時の情緒的安定」、「外出行動のための社会的スキル」、「外出における情報取得のスキル」の3つの視点がある。
- ③心理状態を捉えることを重視し、次に技能面を捉えようとしている。

引用文献

- 1) American Psychiatric Association DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 高橋三郎 大野裕 染矢俊幸(訳) 医学書院 1996
- 2) Rutter M, Schopler E Autism: A Reappraisal of Concepts and Treatment. New York, NY: Plenum Press 7 463-474 1978
- 3) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 309-316 2009
- 4) 松山郁夫 自閉症者とのコミュニケーションをとるための生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(2) 321-327 2010
- 5) 松山郁夫 自閉症者への生活支援に対する福祉施設の生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15(1) 151-158
- 6) 内田博昭 松山郁夫 自閉症の療育支援に対する直接処遇職員の捉え方 九州生活福祉支援研究会研究論文集 2(1) 16-26 2008
- 7) 松山郁夫 自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設の生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281-287 2008
- 8) 同上3)
- 9) 松山郁夫「青年期・成人期の自閉症者に対する生活支援の有効性—旧体系における知的障害者更生施設の生活支援員に対する意識調査を通じて—」 福祉研究 103 90-98 2011
- 10) 松山郁夫 自閉症者の生活状況に対する生活支援員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 17(1) 111-118 2012

謝 辞

調査に際し、障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。

※本稿は、文部科学省科学研究費補助金挑戦的萌芽研究(研究課題番号：23653149、研究代表：松山郁夫)の助成を受けた研究の一部である。